

技術開発

ヒラメ種苗の安定生産技術開発

生産初期における生残率の向上

<目的>

当所では、ヒラメ種苗の生産初期において腸管白濁症が頻発し、生産に大きな影響を受けてきた。これは配合飼料への餌付き不良に起因すると推察され、配合飼料の摂餌率を高める給餌方法の検討がなされてきた。

平成 14 年度には給餌回数の増加、15 年度には給餌開始時期の遅延により、餌付きの効率化が図られた。16 年度は、15 年度と同様の試験を行ったが、疾病発生のため明確な結果は得られなかった。

本年度も、再度前年度同様の試験設定とし、配合飼料の給餌開始時期の違いと餌付きまでに要する日数及び生残率との関係について検討した。

<方法>

同一ロットの種苗を有効水量 23kL の円形アルミ製水槽 2 面に収容し、試験を行った。配合飼料給餌開始時期は、G ステージ(例年より遅い)及び E ステージ(例年)とした。毎日、検鏡により配合飼料の摂餌状況を確認し、サンプル中の摂餌尾数の割合を摂餌率とした。餌付きに要した日数は、給餌開始日から、摂餌率が 100% となった日までの日数とし、生残率は、ふ化から 70 日後の取り上げ尾数から求めた。生物餌料の給餌は、ワムシをふ化後 3 日から配合飼料に餌付くまで、アルテミア幼生をふ化後 15 日から 56 日目までとし、通常の栄養強化後に行った。

<結果の概要・要約>

配合飼料への餌付きに要した日数は、試験区で短く、両区の違いに生残率や成長の差にも影響が認められなかった。これらのことから、給餌開始時期は従来よりも

遅らせた方が、摂餌効率や作業面から優れていると考えられ、15 年度の結果が裏付けられた。

表1 餌付き日数と生残率

	試験区	対照区
配合給餌開始時期(ステージ)	G	E
餌付きに要した日数(日)	7	16
生残率(%)	48.6	48.8

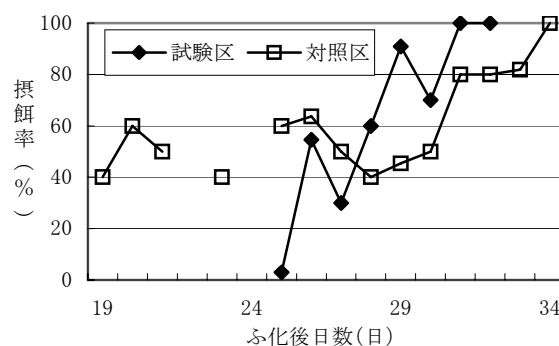


図1 摂餌率の推移

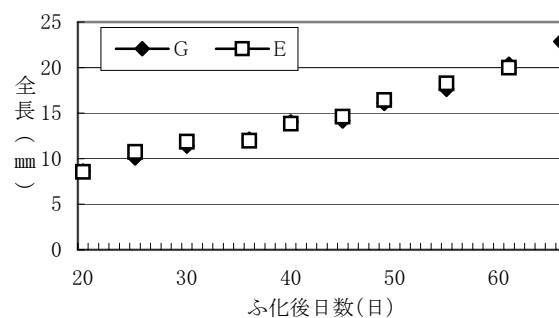


図2 平均全長の推移

<今後の問題点>

- ・ 本結果は試行回数が 1 回のため、試行を増やし、必然性を立証していく必要がある。

<次年度の計画>

- ・ 同一の設定で試験を組み、再現性を確認。